

## 西夏文字における「点」の出現環境と機能

荒川 慎太郎

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

arakawa@aa.tufs.ac.jp

## 要旨

西夏文字は、西夏語の表記のため、11世紀に一度に創製された。その部首と筆画は、現代の研究者が推測したものであるため、現行の西夏文字字典類の字形・画数・筆画の中には疑わしいものもある。西夏文字の筆画は、直線、曲線、そして点によって構成される。こうした基本的な筆画は、字典類索引でこそ活用されるものの、研究対象としては重要視されてこなかった。本考察では西夏文字の「点」を扱う。

報告者は確認できる全ての西夏文字字形の「点」について調査した。結果、「単独では部首とならない。左端に来ない。何かの要素と共起し右側に付く。最大で2点まで、上下に共起する」という特徴を指摘する。また点を含む形は大きく2系統に分かれる。「ノメ」型筆画と「くノ」型の区別、あるいは単独の旁(?)として右端に位置する「ヒ」型と「ヒ」型を一部に持つ型の区別、を強調すると推定する。西夏文字の「点」の機能は、字形の近似する部首の違いを際立たせる「強調符号」と考えられる。

## 1. 西夏語と西夏文字

西夏文字(概要は西田 2001 参照)は、チベット・ビルマ語派に属した死言語、西夏語(概要は西田 1989, 2012 など参照)の表記のために創製された文字である。西夏国(11~13世紀)滅亡後も、西夏語とともにしばらく存続したものの、使用者は絶え、20世紀初頭に解読されるまでその姿が判明しなかった。

西夏文字は、漢字と共通する字形もほぼ無く、「表語文字」ではあるが「文字要素に象形性を欠く」という興味深い特性を持っている。部首という概念で文字が分析されるため、漢字の会意・形声文字に相当する造字を数多く行っている。1文字が1音節であり、1語乃至1形態素である点は漢字と同様である。

𐰪 <sup>1</sup>ne: 「心」<sup>1</sup>                      𐰪 「心」 + 𐰪 「失くす」 = 𐰪 「忘れる」

西夏文字の部首には、位置する場所(漢字の偏・旁・冠などに相当する)によって字形・筆画が変化する「可変部首」とでもいふべきものと、どのような位置でもそれらが変化しない「不変部首」がある。

## 可変部首の例)「水」偏・旁・冠

𐰪 「水」    𐰪 「深い」    𐰪 「血」    𐰪 「バター」    𐰪 「汚泥」

## 不変部首の例)「否定」偏・旁

𐰪 「無い」    𐰪 「禿」    𐰪 「無い」    𐰪 「静寂」

個々の文字は、おおよそ現在の漢字の筆順のように、左上から左下・右上を經由して右下へ書かれる。字種は約6,000字が確認されている。主に楷書体の書体が用いられ、多くの写本・刊本が残っている。西夏語文献は仏典が多数を占めるものの、漢語音韻学に倣った韻書・韻図も何種類か現存する。最も欠損が

<sup>1</sup> 以降、西夏文字の推定音も示す場合は荒川 2014 に基づく表記とする。上付き数字の1は「平声」、2は「上声」という声調を表す。西夏文字には適宜『夏漢字典』のコード番号も付す。

少なく、異なる版本も残るといふ、西夏文字研究にとって有用な韻書は『同音』<sup>2</sup>である。

なお、本稿では西夏文字を示すため、既存のフォントだけでなく、スキャンした図版<sup>3</sup>も掲載する。内容を鑑み、あえてノイズ除去などの修正は行っていない。

## 2. 西夏文字の「点」一本考察で扱うもの

西夏文字は11世紀初頭、一度に創製された文字体系である。漢字に倣った「部首法」やそれによる造字法を取り入れているものの、部首の意味範疇や形状は当然漢字と異なる。西夏文字の部首については、創製当時の認識を体系的に記した資料が現存しないため、現代の研究者が、文字の意味から、共通する部首がある場合にはその意味するところを推測する形で「部首とその意味」を確定させてきた。ただし、研究の進んだ現在でも、意味が判然としない部首は少なくない。

一方、これら西夏文字の部首を成り立たせる「筆画」に関しても、西夏人自身の認識を示す資料は残っておらず、漢字筆画からの類推で導き出されてきた。『夏漢字典』などの現代の字典類では、便宜上「画数引き・部首引き」の索引が一般的であり、広く利用されている。ただし、既存の字典索引における字形・画数・筆画の中には、疑わしいものもある。

西夏文字の部首は、直線、曲線、そして「点」を組み合わせた筆画によって構成される。こうした基本的な筆画については、現用の字書索引でこそ活用されるものの、研究対象としては重要視されてこなかった。西夏文字の成り立ちから、西夏文字の点が漢字のそのように「何かの象形に基づく」ことは考え難い。では共時的な弁別特性（例えば「A」と「A'」のように類似する字形の区別）を目的とするものであろうか。報告者は確認できる全ての西夏文字字形の「点」について調査することにした。

西夏文字の点についても、創製当時の認識を記した資料は現存しない。現代の研究者が、字形を確定する際に「点」として扱ってきた。しかし西夏文字原文を確認すると、報告者も含めこれまでの研究者が「点」として扱ってきたものを再考する必要があると感じた。例えば、下の原文



『黒水』7より

参考：李編1997に基づくフォント字形

𐰃 𐰄 ※点の形、区別なし

だと、偏の最終画の「点」と、旁の最終画の「点(?)」は明らかに字形が異なる。前者に比べると、後者はひらがなの「か」や「い」の最終画のように、少し長さやカーブがあるように見える。「丶」と「㇀」（湾とでも名付けるべきか？）は形からも機能からも区別する必要がある。

後者「㇀」は必ず「𐰃」のような筆画<sup>4</sup>と共起し、右端つまり最終画に位置する。報告者はこの筆画や、「点として扱われてきたが実は短い横棒」を確認し、今回の調査分析から除外することとした。

次の、「𐰄」(門ノノメー)のような筆画で構成される要素の最終画を「点」と見なすか、「短い横棒」と見なすかで異なるフォントが用意されてきた字形がある。今回調べた限りでは「短い横棒」のようである。

<sup>2</sup> 研究者によっては『音同』と訳す。これは当該書籍の題名 龍龍 を「音・同じ」（主・述）と解釈するか、「音←同じ」（名詞・形容詞）と解釈するかによる。

<sup>3</sup> 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所ほか編1997（以降、『黒水』7）より。

<sup>4</sup> 𐰃・𐰄・𐰅 など23例。

例) 当該の要素を含む西夏文字フォントと原文

5173 𐵓 (最終画線扱い), 5232 𐵓 (最終画、扱い) vs 『同音』 𐵓 旧 35B72, 𐵓 新 36B31<sup>5</sup>

3. 「点」の調査

3.1. 「点」の性質と、「点」を持つ字の特徴

西夏文字約 6000 字について、Кычанов 2006<sup>6</sup>や『夏漢字典』<sup>7</sup>を用いて、点を持つ部首・構成要素を選定した(約 370 字)。例えば次のような字形である。



報告者は、『同音』『文海』といった、西夏時代の代表的な字典類からこの類の字形原文を調査した。西夏語文献『同音』『文海』は本来韻書<sup>8</sup>、つまり発音字典であるものの、西夏文字の規範字形を示すものとして、誤りの少ない資料といえる。

まず、最後の「冠の右横」のような例を除くと、「偏の最終画」あるいは「傍の最終画」に点が位置することが確認できる。全ての原文から確認した結果、報告者は西夏文字の「点」について、「**単独では部首とならない。左端に来ることはない。何かの要素と共に右側に付される。最大で 2 点まで、上下に共起する**」という特徴を指摘する。

また、点を含むのは大きく次の 2 系統に分かれることがわかった。※位置と ( ) 内に例数

A 類) 「くノ」あるいは「ノくノ」のような部首 (に付く) 計 188 例

形	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓
位置	偏(14)	傍(50)	傍(11)	偏(78)	冠(13)	傍(22)

B 類) カタカナの「ヒ」のような傍シリーズ (に付く) 計 183 例

形	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓	𐵓
位置	傍(13)	傍(1)	傍(5)	傍(17)	傍(63)	傍(9)	傍(73)	傍(2)

<sup>5</sup> 図版は『黒水』7:47, 169 より。以降『同音』記載箇所は、図録のページ数は省略し西夏研究者に一般的な表記とする。「38A65」であれば「38 葉目右頁 6 行目上から 5 文字目」を指す。

<sup>6</sup> Кычанов 2006 における文字索引は、文字の右端つまり「傍」から文字を検索する形式である。漢字圏の人間にはなじみが無いものの、今回のような「点」を持つ傍の調査には至便である。ちなみに同書では、今回調査対象となる部首を傍に持つ字形が 259 字挙がる。

<sup>7</sup> 李編 1997, 2008, 2013 のうち、増補修訂本である李編 2008 を調査に使用した。

<sup>8</sup> 『同音』『文海』ともに資料の利点、欠点を有する。『文海』は漢語韻書『広韻』に倣ったもので、字形の簡単な分析と説明があるものの、全体の半分強しか現存しない。『同音』は新旧 2 種類以上が完本に近い状態で残る。ただし字形に関しての説明は持たない。韻書としての構成、文字配列については荒川 2014: 研究編 70-76 参照。一般に「甲種本」とされているものを「旧」、「乙種本」を「新」とする。

A 類・B 類ともに、「点を持たない」タイプの、字形の近似する部首も存在する。このような分析結果から、西夏文字の「点」の機能は、字形の近似する部首の違いを際立たせる「強調符号」と考えられる。より具体的には、「ノメ」型筆画と「くノ」型の区別<sup>9</sup>、あるいは単独の旁(?)として右端に位置する「ヒ」型と「ヒ」型を一部に持つ型の区別、を強調する機能があると推定する。

### 3.2 「ノメ」と「くノ」の区別

A 類は「くノ」あるいは「ノくノ」のような部首の右側に付加される。偏・冠・傍の位置に確認できる。



このうち「ノくノ、」は偏・傍・冠に位置し、多くの例から「土」部と見なせることは明らかである。<sup>10</sup>

#### 「ノくノ、」型部首

文字番号	フォント	『同音』旧	『同音』新	字義	筆画
2218		51B31	欠損	「芽苗 <sup>11</sup> 」	ノくノ、
2648		03A37	04A36	「土地」	ノくノ、
2585		31A16	31B43	「地震」	ノくノ、

この部首は偏・傍・冠のどこに位置しても筆画の変わらない不変部首と認定できる。

一方、「くノ、」は偏・傍に位置し、少なくない字形の要素となっているが、それらの字義も字音も多様であり、一つの意符として定めることは難しい。しいて言えば「広まる・拡げる」部か？

3226		19B55	20A64	「輝く」	くノ、
0731		50A13	50B14	「散らす、撒く」	くノ、

いずれにしても、点は筆画「くノ」と共起し、「くノ」と類似する筆画「ノメ」とは共起しない。

#### 例) ノノメ偏とノくノ、偏のミニマルペア

2063		29B15	30A53	「積む」	ノノメ
2068		29B17	30A55	「土地」	ノくノ、

<sup>9</sup> 西夏文字に「ノメ」型筆画と「くノ」型の区別があることは荒川 2018 参照。

<sup>10</sup> 以降、一般的な西夏文字コード番号、既存の西夏文字フォント（字形誤るものに□）、新旧『同音』原文（史・克恰諾夫主編 1997 図録より）と記載位置、字義、筆画をカタカナなどで示す。

<sup>11</sup> 土偏+穿旁で「(土を穿って出てくるので) 芽苗」。

### 3.3. 「ヒ」と「ヒの派生形」の区別

B類は「単独のヒに点が付くことはない」という興味深い特徴があり、「ヒ」と「ヒの派生形」の区別を強調する意図を持っていたのかもしれない。



西夏文字の傍全体から見ると、点に、

- ・L, 凡の派生 (𐰃, 𐰄, 𐰅 など), Lと横棒 (𐰆 など), には付かない。
- ・ヒ, 一ヒ, =ヒ, 一ヒ, 一ヒ, コヒ, 一ヒの派生 (𐰇, 𐰈) には付かない。

という共起制限が確認できる。ただ B類が部首だとすると意味の分かるものは少ない。このタイプは基本的に「傍」としてしか登場しない。偏や冠にならないため、これまで部首としての研究がなかった。本調査は意符あるいは声符としての意味を検討する考察ではないものの、意符らしき一例を挙げる。

#### 「コヒ、」型部首＝「病」旁？

2844	𐰉		46B55		47A65	「病」	コヒ、
2823	𐰊		02B63		03B62	「生まれる <sup>12)</sup>	コヒ、

### 4. 「くノ、」型部首に関する仮説

「くノ」が傍の位置に来る場合のみ、1点が付く場合と2点が付く場合の、2種類の要素となる。最小対も存在する。

#### 例) 「くノ、」型部首と「くノ、、」型部首を持つ字形のミニマルペア

2641			04A71	欠損	{族姓}[枚]	くノ、	
2642			07A27		07B68	「辺、境界」	くノ、、
4573			02A71		03A71	「光」	くノ、
4574			03B18	欠損	「他、彼」	くノ、、	

管見の及ぶ限り、「くノ、、」型部首は傍、すなわち右端に位置するものばかりであり、総数も 10 文字<sup>13)</sup>

<sup>12)</sup> 否定偏+病旁「(病にならないのを願って) 生まれる」。

<sup>13)</sup> 『同音』で旧版から新版になって当該要素が「くノ、、」型部首から「くノ、」型部首に改められた、

と多くはない。西夏文字コード順に字形、推定音、意味を挙げれば次のようになる。

0694 𐰇 𐰇<sup>2mI</sup>:「頬、ほほ」, 0714 𐰇 𐰇<sup>1cyeu</sup>「払う、牛」, 2642 𐰇 𐰇<sup>1pI</sup>:「辺、境界」, 3835 𐰇 𐰇<sup>2lheu</sup>「解脱」, 4319 𐰇 𐰇<sup>2lo:n</sup>「辺、際」, 4338 𐰇 𐰇<sup>2mI</sup>:「メロン、木瓜」, 4574 𐰇 𐰇<sup>2mI</sup>:「他、彼」, 4656 𐰇 𐰇<sup>2thya</sup>:「反切上下合成字」[條], 4951 𐰇 𐰇<sup>2lya</sup>:「辺、界」, 5390 𐰇 𐰇<sup>2phi</sup>「解く」

音と意味だけ見ると、共通項は無いように見える。しかし、この 10 文字のうち、4338 𐰇は 0694 𐰇からの派生（同音字）、4319 𐰇と 4951 𐰇は 2642 𐰇からの派生（同義字）、4656 𐰇<sup>2thya</sup>は 4951 𐰇からの派生（反切上下合成字<sup>14</sup>）、3835 𐰇は 5390 𐰇からの派生（類義字）である。つまり本来「くノ、」型部首を有した文字は、

0694 𐰇 𐰇<sup>2mI</sup>:「頬」, 0714 𐰇 𐰇<sup>1cyeu</sup>「払う」, 2642 𐰇 𐰇<sup>1pI</sup>:「辺」, 4574 𐰇 𐰇<sup>2mI</sup>:「他」, 5390 𐰇 𐰇<sup>2phi</sup>「解く」

の 5 文字に集約できる。それぞれ意味は異なるものの、韻母に -I:（荒川表記で中舌狭母音）ないし前舌狭母音などを持つ音節である。つまり、「くノ、」型部首は意符ではなく声符、それも反切下字（韻母）として機能するものだったのではないだろうか。

## 5. 「くノメ」型部首と「くくノ、」型部首

荒川（forthcoming）では、従来「ノメメ」のような「5画」部首とされてきたものが、「ノメメ」（5画、飛部）、「くノメ」（4画、招部?）、「くくノ」（3画、大部）、の三種の筆画と意符に分類できることを述べた。これらの部首が右端つまり傍に位置し、その右横に点が付されるような字形がある。用例は極めて少ないものの、子細に実見すると興味深い事実が判明する。

### 例) 「くノメ」型部首と「くくノ、」型部首を持つ字形のミニマルペア

1566		 30A73	 31A35	「縛る」	くノメ
0738		 14A72	 15A55	「大（城）」	くくノ、

点が付される字形は「くくノ」型筆画であり、点はそちらの筆画を際立たせる機能を持つと考えられる。筆者の推論だが、西夏文字作成者はいったん「くノメ型筆画とくくノ型筆画が異なる」というミニマルペアの字形を作った。しかし、区別が紛らわしい字形となったため、筆画の区別のため、点を付したのではないだろうか（現在の字典・フォントの字形は「くノメ型筆画とくくノ型筆画が異なる」ことが忘れ去られ、しかも「ノメメ型とノメメ、型の区別」として誤認識されているといえる）。西夏文字の全ての点筆画の機能とは認められないものの、これは西夏文字の部首・筆画を考える上で重要かと思われる。

つまり 1 点少ないものとして確認できる文字 2690 𐰇<sup>2ko'</sup>「帆?」があり、これを除外する。ただし現行の字書の記載形、フォントの字形は「𐰇」であり「2点」と認識されている。

<sup>14</sup> 西夏語に無い音節表記などに使われる文字。旧版に無し。新版成立までに新しく作られたか？

## 傍の位置で対立するミニマルペアがある場合の、弁別の変容

西夏文字創製時	現代 (の誤認識)
ノメメ vs くくノ	ノメメ ※2つとも同字
くノメ vs くくノ、	ノメメ vs ノメメ、 ※点による弁別

## 6. 結論と今後の課題

「点」を有する AB 類ともに、「点を持たない」タイプの「筆画は異なるものの字形の近似する部首」が存在する。すなわち、西夏文字の「点」の機能は、字形の近似する部首の違いを際立たせる「強調符号」と考えられる。より具体的には、「ノメ」型筆画と「くノ」型の区別、あるいは単独の傍(?)として右端に位置する「ヒ」型と「ヒ」型を一部に持つ型の区別、を強調する機能があると推定する。ただし本考察では、「点」を有する部首の全ての意味 (あるいは声符としての機能) は明らかにできなかった。今後の課題としたい。

西夏文字の字形・筆画については、既存のフォントや現行の字典・索引にも全幅の信頼を置けるとは言えない。今後も子細に字形を実見調査していく必要がある。

## 図版略称

『黒水』7 : 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黒水城文獻』7

## 参考文献

荒川慎太郎 2014 『西夏文金剛經の研究』, 松香堂

\_\_\_\_\_ 2018 「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』, 日本言語学会: 442-447

\_\_\_\_\_ forthcoming 「西夏文字の、ある「5画」部首の再分類」

俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所, 中國社會科學院民族研究所, 上海古籍出版社編 1997 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黒水城文獻』7, 上海: 上海古籍出版社

Кычанов, Е. И. (составитель), Аракава С. (со-составитель) 2006 Словарь тангутского (Си Ся) языка: *Тангутско-русско-англо-китайский словарь*, Kyoto: Faculty of Letters, Kyoto University.

李範文編 1997 『夏漢字典』, 北京: 中国社会科学出版社 (増補修正本 2008, 簡明版 2013)

羅福成 1935 『西夏國書字典音同』, 旅順: 庫籍整理處

西田龍雄 1989 「西夏語」『言語学大辞典』中卷(亀井孝・河野六郎・千野栄一編著), 三省堂: 408-429{西田 2012 に修訂再録}

\_\_\_\_\_ 2001 「西夏文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著), 三省堂: 537-547

\_\_\_\_\_ 2012 『西夏語研究新論』, 松香堂

本研究は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2)―文字学に関する既存術語の再検討」、科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)「アジアの文字研究を対象とした、「字形」研究基盤の構築」(代表: 荒川慎太郎)の成果の一部である。2020年2月の、ロシアにおける調査については同科研によるものである。調査の便宜を図っていただいたイリーナ・ポボーヴァ所長、キリル・ボグダノフ博士に深くお礼申し上げる。